

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Helen D. Hazen, Heike C. Alberts, and Kazimierz J. Zaniewski

*Population Geography: Social Justice for a Sustainable World*

Routledge, 2024, xvi + 334p.

本書はアメリカの大学研究者3名による人口地理学の教科書である。一般に人口地理学は、日本では人気のある学問分野とは言いがたいのだが、英語圏ではどうやら依然として一定の需要があるらしく、ここ数年だけでも本書を含めて複数のテキストが刊行されている。興味深いのは、こうしたテキスト群には執筆者らの独自性がよく示されていることで、例えば2021年に第4版が出た Newbold の本は良い意味で標準的なテキストであるが、Barcus and Halfacree (2017) は人口移動に非常に多くのページを割いているし、Hazen らの本書は従来の人口地理で扱いの薄かった人口と社会正義、持続可能性の問題に挑んでいる。各著者によるこうした試みは、おそらく人口地理学の可能性を拡げていこうという意図の表れであろうが、分野の専門誌 *Population, Space and Place* が盛況であることなどを考え合わせると、海外の人口地理学者たちの熱意には素直に感嘆する。

以下、本書の内容を概観する。本書は全体で12章から構成されており、序章に続いて、人口統計、人口の分布と構造、人口増加、人口と環境、資源、科学技術、出生、死亡、疾病・健康、人口移動、都市、気候変動等に関する章が並ぶ。各章のテーマは教科書に相応しく、人口地理としてはごく標準的なものである。また、分析指標や理論についても基本はかなり網羅されており、例えば生命表や各種の出生指標、Davis and Blake の近接要因、疫学転換などにも一定のページが割かれている。一方、副題からも分かる通り、本書の特徴は人口問題を社会正義と持続可能性の観点から論じていることであり、各題目では一般的な説明のあとに様々なトピックが批判的に検討されている。具体的には、人口増減、妊娠中絶、女性の権利、南北格差、非正規移民、SDGs といった現代社会の喫緊の課題について、「経済」「生態学」「社会的公正」の3要素を手がかりに議論を進めている。

本書は地理の教科書らしく、地図や図表、写真を多数掲載し、事例として多くの国・地域の人口問題を取り上げている。この本を読むことで、学生諸氏は人口分析の基礎を身につけ、現代世界の人口の状況とその社会的な意味を学ぶことができるだろう。ただし、初学者向けの教科書という本書の性格に鑑みると、内容に関して全く疑問がないわけではない。一つめの疑問は、著者らの説明に一部偏りがあるように見受けられる点である。本書の一部において、著者（の全部か一部）はマルクス主義的な見方を社会正義的と評価する一方、マルサスや新マルサス主義、「楽観的」経済学者ら（例えば Boserup）はかなり強く批判している。しかし、評者が読んだ限りでは、批判された人々の学説や社会的評価に関する情報が不十分な箇所もあるように感じられた。著者らが自身の立場性を明らかにするのは、学生にとってもよいことであるが、本書が教科書である以上は、学生が様々な主張の意義を自分で判断できるよう、批判対象の考え方についてももう少し説明を加えたほうがいいのではないかと。二つめの疑問は、国内の人口移動がほとんど扱われていないことである。最近では migration ≡ 国際人口移動という見方が強いが、人口地理学には国内移動に関する優れた研究も多い。本書では各国の事例を多数取り上げているので、国内の地域問題にまで十分手が回らなかったのかもしれないが、改版する機会があれば、国内移動の扱いも増やしてもらいたい。

(清水昌人)